一　次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

下人は、それらの死骸の腐乱した臭気に思わず、鼻をおおった。しかし、その手は、次の瞬間には、もう鼻をおおうことを忘れていた。（1）ある強い感情が、ほとんどことごとくこの男の嗅覚を（a）ウバってしまったからである。

下人の目は、その時、はじめて、その死骸の中にうずくまっている人間を見た。檜皮色の着物を着た、背の低い、痩せた、白髪頭の、猿のような老婆である。その老婆は、右の手に火をともした松の木切れを持って、その死骸の一つの顔をのぞきこむように眺めていた。髪の毛の長いところを見ると、たぶん女の死骸であろう。

下人は、六分の恐怖と四分の好奇心とに動かされて、【　X　】は息をするのさえ忘れていた。旧記の記者の語を借りれば、「頭身の毛も太る」ように感じたのである。すると、老婆は、松の木切れを、床板の間に挿して、それから、今まで眺めていた死骸の首に両手をかけると、ちょうど、猿の親が猿の子のしらみをとるように、その長い髪の毛を一本ずつ抜きはじめた。髪は手に従って抜けるらしい。

その髪の毛が、一本ずつ抜けるのに従って、下人の心からは、恐怖が少しずつ消えていった。そうして、それと同時に、この老婆に対する激しい憎悪が、少しずつ動いてきた。――いや、この老婆に対すると言っては、【　Y　】があるかもしれない。むしろ、（2）あらゆる悪に対する反感が、一分ごとに強さを増してきたのである。この時、誰かがこの下人に、さっき門の下でこの男が考えていた、飢え死にをするか盗人になるかという問題を、改めて持ち出したら、恐らく下人は、なんの未練もなく、飢え死にを選んだことであろう。それほど、この男の悪を憎む心は、老婆の床に挿した松の木切れのように、勢いよく燃え上がりだしていたのである。

下人には、もちろん、なぜ老婆が死人の髪の毛を抜くかわからなかった。したがって、合理的には、それを善悪のいずれにかたづけてよいか知らなかった。しかし下人にとっては、（3）この雨の夜に、この羅生門の上で、死人の髪の毛を抜くということが、（4）それだけで既に許すべからざる悪であった。もちろん、下人は、さっきまで、自分が、盗人になる気でいたことなぞは、とうに忘れているのである。

そこで、下人は、両足に力を入れて、いきなり、はしごから上へ飛び上がった。そうして聖柄の太刀に手をかけながら、大股に老婆の前へ歩みよった。老婆が驚いたのは言うまでもない。

老婆は、一目下人を見ると、まるで弩にでもはじかれたように、飛び上がった。

「おのれ、どこへ行く。」

下人は、老婆が死骸につまずきながら、慌てふためいて逃げようとする行く手を（b）塞いで、こう罵った。老婆は、それでも下人を突きのけて行こうとする。下人はまた、それを行かすまいとして、押しもどす。二人は死骸の中で、しばらく、無言のまま、つかみ合った。しかし勝敗は、はじめから、わかっている。下人はとうとう、老婆の腕をつかんで、無理にそこへねじ倒した。ちょうど、鶏の脚のような、骨と皮ばかりの腕である。

「何をしていた。言え。言わぬと、これだぞよ。」

下人は、老婆を突き放すと、いきなり、太刀の鞘を払って、白い鋼の色を、その目の前へ突きつけた。けれども、老婆は黙っている。両手をわなわなふるわせて、肩で息を切りながら、目を、眼球がまぶたの外へ出そうになるほど、見開いて、おしのように執拗く黙っている。これを見ると、下人ははじめて明白に、この老婆の生死が、全然、自分の意志に支配されているということを意識した。そうしてこの意識は、今までけわしく燃えていた憎悪の心を、いつの間にか冷ましてしまった。後に残ったのは、ただ、ある仕事をして、それが円満に成就した時の、安らかな得意と満足とがあるばかりである。そこで、下人は、老婆を、見下ろしながら、少し声をやわらげてこう言った。

「俺は検非違使の庁の役人などではない。今しがたこの門の下を通りかかった旅の者だ。だからおまえに縄をかけて、どうしようというようなことはない。ただ、今時分、この門の上で、何をしていたのだか、それを俺に話しさえすればいいのだ。」

すると、老婆は、見開いていた目を、いっそう大きくして、じっとその下人の顔を見守った。まぶたの赤くなった、肉食鳥のような、鋭い目で見たのである。それから、しわで、ほとんど、鼻と一つになった唇を、何か物でもかんでいるように、動かした。細い喉で、とがった喉仏の動いているのが見える。その時、その喉から、からすの鳴くような声が、あえぎあえぎ、下人の耳へ伝わってきた。

「この髪を抜いてな、この髪を抜いてな、かつらにしようと思うたのじゃ。」

下人は、老婆の答えが（c）存外、平凡なのに失望した。そうして失望すると同時に、また前の憎悪が、冷ややかな（d）侮蔑といっしょに、心の中へ入ってきた。すると、その気色が、先方へも通じたのであろう。老婆は、片手に、まだ死骸の頭からとった長い抜け毛を持ったなり、墓のつぶやくような声で、口ごもりながら、こんなことを言った。

「なるほどな、死人の髪の毛を抜くということは、なんぼう悪いことかもしれぬ。じゃが、ここにいる死人どもは、皆、そのくらいなことを、されてもいい人間ばかりだぞよ。現に、わしが今、髪を抜いた女などはな、蛇を四寸ばかりずつに切って干したのを、干し魚だと言うて、太刀帯の陣へ売りに往んだわ。疫病にかかって死なんだら、今でも売りに往んでいたことであろ。それもよ、この女の売る干し魚は、味がよいと言うて、太刀帯どもが、欠かさず菜料に買っていたそうな。わしは、この女のしたことが悪いとは思うていぬ。せねば、飢え死にをするのじゃて、しかたがなくしたことであろ。されば、今また、わしのしていたことも悪いこととは思わぬぞよ。これとてもやはりせねば、飢え死にをするじゃて、しかたがなくすることじゃわいの。じゃて、そのしかたがないことを、よく知っていたこの女は、おおかたわしのすることも（5）大目に見てくれるであろ。」

老婆は、だいたいこんな意味のことを言った。

下人は、太刀を鞘におさめて、その太刀の柄を左の手でおさえながら、（e）レイゼンとして、この話を聞いていた。もちろん、（6）右の手では、赤く頬にうみを持った大きなにきびを気にしながら、聞いているのである。しかし、これを聞いているうちに、下人の心には、（7）ある勇気が生まれてきた。それは、さっき門の下で、この男には欠けていた勇気である。そうして、また（8）さっきこの門の上へ上がって、この老婆を捕らえた時の勇気とは、全然、反対な方向に動こうとする勇気である。下人は、飢え死にをするか盗人になるかに、迷わなかったばかりではない。その時の、この男の心持ちから言えば、飢え死になどということは、ほとんど、考えることさえできないほど、意識の外に追い出されていた。

「きっと、そうか。」

老婆の話が終わると、（9）下人はあざけるような声で念を押した。そうして、一足前へ出ると、不意に右の手をにきびから離して、老婆の襟髪をつかみながら、かみつくようにこう言った。

「では、俺が引剥ぎをしようと恨むまいな。俺もそうしなければ、飢え死にをする体なのだ。」

下人は、すばやく、老婆の着物を剥ぎとった。それから、足にしがみつこうとする老婆を、手荒く死骸の上へ蹴倒した。はしごの口までは、僅かに五歩を数えるばかりである。下人は、剥ぎとった檜皮色の着物をわきにかかえて、またたく間に急なはしごを夜の底へかけ下りた。

しばらく、死んだように倒れていた老婆が、死骸の中から、その裸の体を起こしたのは、それから間もなくのことである。老婆は、つぶやくような、うめくような声を立てながら、まだ燃えている火の光をたよりに、はしごの口まで、はっていった。そうして、そこから、短い白髪を逆さまにして、門の下をのぞきこんだ。外には、ただ、黒洞々たる夜があるばかりである。

下人の行方は、誰も知らない。

問一　本文中の傍線部a～eについて、漢字はひらがな、カタカナは漢字に直せ。

問二　本文中の空欄Xには「すこしの間」、Yには「誤解を招きやすい言い方」という意味を持つ漢字二字の熟語を埋めよ。

問三　傍線部1「ある強い感情」を具体的に記した部分を十五字以内で抜き出して記せ。

問四　傍線部2「あらゆる悪に対する反感」について次のように説明した。空欄AとBに、両者が「対」の意味となるように、適切な語を、それぞれ漢字二字で書け。

説明：老婆に対する【　A　】的なものではなく、悪【　B　】が存在すること自体に対して、許せないとする気持ち。

問五　傍線部3「この雨の夜に、この羅生門の上で」という表現から、下人のどのような心情が読み取れるか、適切なものを選べ。

ア　大きな音をたてる雨や死体の捨てられた羅生門を、特別な状況だと感じている。

イ　雨の夜の不気味な雰囲気の羅生門なので、悪人がいても許されると感じている。

ウ　暗い雨の夜の羅生門なので、不機嫌になっている。

エ　やまない雨や腐爛した死骸の臭気のため、恐怖が和らぐのを感じている。

オ　雨にも羅生門の不気味さにも慣れて、恐怖が和らぐのを感じている。

問六　傍線部4「それだけで既に許すべからざる悪であった」について次のように説明した。空欄に適切な語を選び、記号で答えなさい。

説明：「それだけ」とは、老婆が死人の髪を抜いているという〔①　　〕だけということである。老婆が死人の髪を抜く〔②　　〕については知らなくても、という意味を含ませている。老婆の〔①　　〕を悪と感じたのが、下人の〔③　　〕な判断であったことが読み取れる。

ア　可能性　イ　理由　ウ　行為　エ　合理的　オ　直観的　カ　理性的

問七　傍線部5「大目に見てくれるであろ。」とあるが、この考えに至る論理を、五十字以上六十字以内で説明せよ。

問八　傍線部6「右の手では、赤く頬にうみを持った大きなにきびを気にしながら」の説明として最も適当なものを、次のア～エから一つ選び、記号で答えよ。

ア　老婆の信じられないような話に思わず引き込まれ、我を忘れている様子が表されている。

イ　老婆の説得力のある話にすっかり感心し、心が動かされる様子が表されている。

ウ　老婆の不条理な言い逃れを全く信じずに、反撃の機をうかがう様子が表されている。

エ　老婆の理屈をそれなりに聞きながら、別の考えに気をとられている様子が表されている。

問九　傍線部7「ある勇気」と、8「さっきこの門の上へ上がって、この老婆を捕らえた時の勇気」は、それぞれ「どうする」勇気か。「～勇気」という形で、それぞれ十字以内で答えよ。（「勇気」も字数に含む）

問十　傍線部9「下人はあざけるような声で念を押した」とあるが、「あざけるような」には、下人のどのような気持ちが表れているか、説明せよ。

問十一　本作品の作者名を漢字で書け。